

コロラド州立大学へ行った感想

(アメリカ医療事情)

渋谷直恵

(2015年9月～10月まで)

2015年の8月5日、主人と2人成田発ニューヨーク行きに搭乗。8月は大学も夏休みなのでニューヨーク、ワシントン、ボストン、フィラデルフィア観光。

さらにテネシー州のメンフィスにも足を延ばし、プレスリーのグレースランドや、BBキングスのブルースにも酔いしれた。

2人とも健康と好天に恵まれ、ご機嫌で実に楽しい自由旅行だった。

いよいよ9月。デンバー入り。宿舍も思ったより広く設備もそろい、WIFI環境も最高。大学はとても素敵！さすが全米キャンパストップ10内。学生達は勉強熱心。習った言葉を使って活発に話そうと努力。日立製の、でっかいスクリーンで情景を見せながら瞬時に、容易に理解させてゆく米国式語学教育に衝撃。学生を引きつけ、興味を持たせ、積極的に勉強させる手法で、大きな刺激を受けた。

ある朝、体がとても痛く感じられ、起き上がれなくなった。ベッドの上でなすすべもなく苦しむ。今まで味わった事がない激しい痛み。毎朝2時間ほどその痛みを耐える。この痛みは帰国の日まで続き、苦しんだ。

過去の皆さんの体験談は素敵なものばかりだったので「なぜ私がこんな時に、こんな病気になるの？」と泣けた。これから書く事はこれまでの皆さんとは変わった感想になるが、今後の参考になればと「アメリカで病気になること・・・」というテーマで、書きたいと思う。

突然激しい腰痛と臀部の痛みで、FCの整形外科へすぐにも行きたかった。しかし日本のように簡単に医師に会いに行けない。保険会社にTELすると、日本女性の優しい声で「どうなさいましたか?」。現在地を答えるとFCの総合病院を2つ紹介され、そこへ行くよう指示される。予約は自分達でしなければならぬし、そこへ行くのも自分達。(これらは日本人病人には、本当に大変。)車社会で、どこへ行くにも遠く、土地には不案内であり、タクシーもあまりなく困った。医療通訳により、1週間後の緊急総合外来予約ができる。医者には日本のように触診はしない。「自分で歩いてみて!腰をまげて」などと言って、こちらに動作させ、その動きや反応を見て判断するようだ。言われたことは「多分歳のせい。そのうち治るのでは?」医療通訳は西洋医学が嫌いなようでカイロプロテックの方

が良いのでは、と担当女医と相談し、フィジカル・セラピーへしばらく通うよう決まる。そこへ行くにも要予約でまた1週間後。そして週2～3回、マッサージに鍼、ホットパック。その間、そこは医者ではないため薬はもらえないし、激痛は続く。

日本の息子にSOS。息子からは通訳に遠慮せず、「カイロなんかダメだから整形に行きたい」と、はっきり言うようにと忠告される。整形に行きたい意志をはっきり伝え、その後整形外科に予約ができ、整形外科医にやっと会えた。

発病後3週間後に会えた医師は私の様子を見て「坐骨神経痛とすべり症かも」と言った。そう言うだけで薬の処方もないし、処置も何もせずポケットに手を突っ込んだまま去ろうとする。激痛に耐えやっと会った医者なので、思わず私は「薬を欲しい、朝の痛みはこんなふう」と様子を懸命に伝えた。「あなたが欲しいのなら・・・」という感じで医者は薬を処方したが、それはとても強い薬だった。日本から持って行った医者の鎮痛剤は「こんなものは効かない」と言われ、アスピリン系の鎮痛剤と「ステロイド」を処方。私は薬の知識があまりないが、主人が「ステロイドとは・・・」と絶句。CSU後任の石岡薬プロ?も「のまない方がよい。日本では考えられない処方!」と言われたが、死ぬほど痛かった 私としては、医師の指示を信じてきつい薬でも服用するしかなかった。

結果、その日、大学で6度も嘔吐し、ひどいめまい、歩行困難に陥りふらふら。主人に助けてもらい、やっとで授業へ。

しかし良くなりた一心でその薬を飲み続けたが、一向に効果がなく、もう一度外科医との面会を頼んだ。会えたのは4週間後。相変わらず激痛が続く。特に起床2時間ほどは釘30本程の束を足の付け根に入れられている感じで痛い。起き上がるとそこに上体が重なるのでもっと痛くなり、のたうち回らねばならなかった。2時間ほどたつと何かにつかまって起き、主人に用意してもらった簡単な朝食をとる。痛みが去らないので再度整形医に予約。整形外科医からはMRIを撮るよう指示されるが、その予約がさらに1週間後。結果を聞くのにまた1週間要した。

その日、次は注射か手術をするようにと言われた。注射を頼み、その場でやってもらえると期待したが、注射は別の注射専門医に要予約と言われた。その場で注射予約を入れてくれたが、今度は注射専門医が忙しいとかで、予約可能日を先方から知らせてくれるとのこと。注射1本約1000ドル(12万5千円)だそう。しかし予約OKのTELは、とうとう帰国日までかかってこなかった。

米国の医療は進んでいると聞かすが、ことほど左様に、病人がすぐ希望通りに病院へ行けないのは、実に不便で最悪である。医療システムの分業化が進み過ぎ、医療費を払うのも別の住所。日本のようにすぐ窓口で払えない。また旅行保険でペイフリーだったにもかかわらず、信用されず困った。アメリカでは、そのようなシステムがないようだった。

しかしそんな時は、保険会社が電話でしっかり交渉してくれた。薬も日本のように病院に隣接の薬局はあり得なく、スーパーなどへ行って、受け取る。何でも予約が必要で、それに最低1週間かかる。患者は苦しくても我慢我慢。痛くても辛くても日本のようにすぐ病院へ行けない。そんな苦しい体で、車も無いのに遠い、いろいろな医療機関へ行かなければならないほどさがある。無理してやっと思っても、診療はたったの2分ほど。

しまいにはワシントン在住の米国人弁護士の友人にTELした。日本にいたこともある彼女は「そうなの、アメリカの医療システムは何でも予約予約でほんとに困るの。あなたがアジア人だからってわけではない。だから普段から病気にかからないよう気を付け、薬はドラッグへ行って買うのよ」と慰めてくれた。

ほぼ1カ月半医者の方通行きつい薬を飲み続けたが、痛みが去らなく、薬の副作用が怖かった私は娘に鎮痛剤と貼り薬をEMS便で送ってもらった。薬はある程度は効いたが痛みはまだ残り、とうとう帰国となった。

帰国後すぐに近くの整形へ。医師は触診し、レントゲンで見て坐骨神経痛と米国整形医と同じ判断をし、即座に3本注射し、お金は全部で850円。そして隣接の薬局で痛み止めと貼り薬をすぐにもらった。何と日本の医療の迅速で、機能的で、素晴らしいことか！

ついでに骨量測定。最低値の5になっていた。「坐骨神経痛と(いつの間にか骨折)を併発していたのかも、ずいぶん痛かったでしょう」と言われた。ステロイドの副作用は骨を弱くし、体質を変えてしまう恐ろしさだと言う。それが理由ではなかるうが、帰国後、私の身長は4cm、体重は8kgも減っていた。痛さで痩せるって、ほんとのことだった。

ひどい腰痛で、重い荷物が心配で、FCの郵便局から自宅へ18kg返送した。局までは徒歩10分だが、重い荷物はレンタカーで運んだ。18kgで約22,000円。船便はないそうで飛行機。富山のわが家へ、5日間で届いた。

郵便局はとても混むので、送る日は朝9時に行くべき。送る箱は局に売っている。

レンタカー(日産車)費用は全保険込み24時間65ドル程度を3日間借りた。郵便局へ荷物を運び、ロッキー国立公園と近隣の街を訪れ、楽しい思い出ができた。

私は海外ロングステイが大好きで、今までよく行っていた。常に元気で活動的。こんな目に遭ったのは初めて。

皆さんに強調したいことは、私達はいつどこで、どんな病気にかかるかもしれないということ。

カードの保険では医療通訳は呼べないだろうし、通訳の交通費も出ないそう。

大手の医療保険に十分加入して行ったお蔭で、諸費用は不要だった。保険会社にTELし連絡を密にすることで、細かいお世話も受けられ心強かった。外国での旅行保険がいかに大事か、思い知らされた。

少くとも英語ができてアメリカの病院では書かせられる書類、手続、あっちへ行って！こっちへ行ってなど、アメリカの医療システムも習慣も交通も複雑煩瑣で、現地在住の通訳なしでは全くやっていけない。

どこへ行くにも遠く、何をどうしたらいいかも、外国ではわからない。途方に暮れる。本当に疲れた。

ともに苦勞してくれた主人の希望がロッキー山脈ドライブ。私も当日は痛みを我慢してついて行ったが、そのすばらしさ!!行って良かった。アメリカの自然のすばらしさ、雄大さを味わった。

今回はアメリカの国立公園をレンタカーで回ろうとの計画を、主人はもう考え始めている。もちろん旅行保険は最高のものに加入して。



コロラド州立大学の学生と